

# アイデアは秀、字形は不可

偏旁・冠脚を組み合わせて一字を作る分合活字

小宮山博史

◎金属活字や写植、デジタルフォントで文章を組んだとき、無い字が出てきて困ったという経験を持つ方も多いと思います。写植文字盤に目的の文字がない場合は、オペレーターが別の字の偏旁や旁、冠や脚を印字し、印画紙を上手に切り離して貼り合わせ一字を作っていました。金属活字の場合も同じように活字を切り離して一字を作りますが、鉛材ですから工作機械がないとできません。鑄造が間に合わないときとか、母型がない場合に限って使われた、その場限りのものでした。これは「作字」という方法です。デジタルフォントでは切ったり貼ったりはしませんが、CRT上で合成しますから方法は同じです。違うのは作字された文字を保存できるということでしょうか。

これと似たような方法で一字を作る活字に、分合活字ぶんごうかつしというのがあります。作字と根本的に違うのは、分合活字は最初から組み合わせることを目的に開発された活字で、偏と旁、冠と脚の四種に分けて作ってあります。この用語がはじめて日本に持ち込まれたのは明治二二(一八六九)年ではないでしょうか。この年の一月上海からウイリアム・ギャンプルが長崎に来て、活字印刷術と活字製法を教授したとき、Divisible type という用語で伝えたのではな

いかと思っっています。上海美華書館の旧 Double Small Pica 二号の Two-line Brevier 二号は分合活字です。日本は美華書館の活字を導入しましたから、本木昌造や伝習生には当然そのシステムについて説明があったと考えるのが自然だと思いますが、いかがでしょうか。では日本の活字見本帳に載っている分合活字は、と思っ調べてみました。しかし資料自体が少なくこれで全部とはいえないのが残念です。

古いところでは紙幣局活版部、明治一〇（一八七七）年発行の総合見本帳『活版見本』には「第四号分合」と「第五号分合」の二種が、二頁に掲載されています。また明治一八年に印刷局活版部が出した『活字紋様見本』にも同じものが載っています。★図六五 四号では三分の一幅の偏二〇種、三分の二幅の旁二〇種で、それによって作られた文字が二〇字あります。五号は三分の一幅の偏一四種、三分の二幅の旁おなじく一四種で、それを組み合わせて作られた文字一四字が載っっています。

東京築地活版製造所発行の活字総数見本帳『二号明朝活字書体見本 全』★図六六（明治三五年）、『五号明朝活字書体見本 全』★図六七（明治二七年）には「分合文字」という名前で分合活字が掲載されています。掲載の二号分合文字は、三分の一幅一〇〇種、三分の二幅九〇一種で、合成された文字は六二字です。五号分合文字は三分の一幅八五種、三分の二幅二七二種で、合成された文字は載っいていません。二号総数見本の収録漢字は七、六五二字、五号は九、三六八字ですが、それだけあっても出現予測のできない不足字種への用意として制作していたのでしょうか。また明治二八（一八九五）年発行の総合見本帳『座右の友第二』と明治三三年発行の『新製見本』の価格表には二号と五号の「分合字」が載っいていますので、この年までは販売していたことが確認できます。また分合文字あるいは分合字は二号と五号だけにあったこともわかります。

日本の分合活字は二号、四号、五号の三サイズで作られたようです。紙幣局活版部は本木

★図六五……明治一八（一八八五）年、印刷局活版部刊の総合見本帳『活字紋様見本』収録の分合活字。  
〔二四九頁参照〕

★図六六……明治二五（一八九二）年、東京築地活版製造所刊の総数見本帳『二号明朝活字書体見本 全』収録の分合活字。単体の二号漢字にたいして分合文字の彫刻の品質はかなり劣る。  
〔二五〇・二五一頁参照〕

★図六七……明治二七（一八九四）年、東京築地活版製造所刊の総数見本帳『五号明朝活字書体見本 全』収録の分合活字。  
〔二五二・二五三頁参照〕

四 號 分 合

才	牛	夕	方	扌	弓	子	土	力	イ
且	土	且	奇	立	瓜	欠	欠	喬	加
狙	牡	殂	旣	拉	弧	攷	坎	勸	伽
齒	骨	革	車	言	耳	血	耒	羊	片
扁	段	印	可	義	氏	丑	云	攷	旁
鯁	骸	鞞	軻	議	低	衄	耘	殺	勝

五 號 分 合

王	彳	夕	木	日	斤	弓
朱	可	直	夂	寺	頁	也
珠	河	殖	梭	時	頤	弛
齒	角	金	貝	月	糸	前
女	攷	丑	寸	失	世	見
鯁	般	鈕	肘	朕	繼	視

昌造と一緒にギャンブルの講習を受けましたが、本木は行動をこもにせず勸工寮活字局に残った人々がもこなっています。活字局は明治七年太政官印書局に統合され、印書局は明治八年大蔵省紙幣寮に統合されて活版局、明治一〇年紙幣局活版部、明治一一年大蔵省印刷局と目が回るような組織変更です。四号に分合活字があるのは、たぶん明治一〇年ごろまでの本文活字の大きさは四号が多かったことによるのかもしれない。

○ 分合文字

予しイノリ力十口口口土女子寸山中幸弓彡彡  
 戈小斗才支女方斤日月及欠木及毛彡火片引  
 牛犬才玉瓦瓜正田目自矢矛石而禾立米糸缶  
 羊赤耳臣舌舟虫色角言豆豕彡貝足身車辛辛  
 酉卩金里長革韋頁倉馬佳音骨鬼魚鳥鹵麥黍  
 黑黼鼻鼻鬲鼠

万下丈丑丘且丙丕丞中丰丹主乃乏乍乎自辰  
 乘乙也乞龟事乾亏于云五互开互亘亟亢交亥  
 亦亨人令介参以令休余命佳会係保便元兄先  
 充免兜龜内全入公兮兵共其回箕奘具兼冀典  
 冉冊回再葍冗豕冢冢冬凡凶出函刀刃分切刃列

東京市築地貳丁目拾七番地東京築地活版製書所

刑别利刷制前刺剌剌剪劉力尢加劬助効勇動  
 勞勤勻勿勾包匈匈剝七化匝匡十午千于凡午  
 升半半卓卑卜占卡未巳卯卯危卷卻眺厭参又  
 及及及友取受口古召可史只叵另号右台台司  
 各名合同向后吉吏含否呆呈君吾吝和咸哀咨  
 哲周尚員哥唇商商高罍喬喬喜罍罍嚴囊回  
 自旬目目目目目目目目目目目目目目目目目

觜解旬討魯諸谷豆豐豎豐豕象豸負貢貫責賁  
貴貪賈賣賞賢賣贊赤赫蹙蹙走贛車軍農迷過  
逢逕適適遂邊邠邠那邪邕郭鄭酉酋醫量金銜  
長門閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤閤  
雇集雍雜離離雪雫雫雫雫雫雫雫雫雫雫雫雫  
窰音頁頃頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤  
麼黃黑黨鼻齊齧齧齧齧齧齧齧齧齧齧齧齧齧齧齧

仆悟吻喊刊塙塙塙塙塙塙塙塙塙塙塙塙塙塙塙  
穫狀狃琪猊略皜皜皜皜皜皜皜皜皜皜皜皜皜皜皜  
翊站縉耒胆臙蛸裙衲被贓蹠軹銖雕頭顚顚顚顚  
顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚顚

駟 蟻 黏 黯 齧

○ 片 假 名

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツ  
子ネナラムウ井ノオクヤマケフコエテアサ  
キエメミシエヒモセスン一厶片メパピプペ

東京市築地貳丁目拾七番地東京築地活版製本所





◎分合活字の制作者と制作年を日本で最初に紹介したのは、『印刷雑誌』第二四卷第一号（昭和二年一月）所収「中国印刷術の発達に就きて」です。以下分合活字の部分を引用します。

道光十六年（西曆一八三六年）フランス人エム・シー・グラント（M. C. Grand）は、華文の字母の多きにかんがみて、華文合せ字（華文累積字）を考へた。それは部首と原字を分けたのである。例えば「蜿」「碗」「妬」<sup>マ</sup>（引用者註）<sup>マ</sup>（宛、マ正し）等は「虫」「石」「女」と「宛」を作り、「蜿」の時は「虫」と「宛」を合わせたのである。之は排列不均一に成り、澳門<sup>マカオ</sup>に保存されたるが永く使用されず遂に廃止された。

原文は一九三二（昭和七）年上海の商務印書館発行の『最近三十五年之中国教育』所収「三十五年来中国之印刷物」で、執筆は女性の賀聖薫。これを翻訳して『印刷雑誌』に紹介したのは華中印書局の杉山憲一です。

賀聖薫の文章はフランス人というところだけ正しく、あとはみな間違っています。

賀聖薫の文章のもっとも変わったのは美華書館六〇年史に相当する *The Mission Press in China* (Gilbert McIntosh. American Presbyterian Mission Press. 1895) です。原文は次のようになっています。

Another font was made about the year 1836 by M.C.Grand, a type founder in Paris; the special characteristic of the font being the casting of the radical and primitive on separate bodies (e.g., 虫宛蜿 or 魚秋) thus requiring few matrices.

ちよつと寄り道です。

フランス人  
M・C・グラント  
分合活字と  
作る

商務印書館を設立した四人は、上海の北米長老教会清心堂が運営する学校清心書院で学んでいます。清心堂は第六回に書きましたが、ヘボンと岸田吟香が『和英語林集成』の印刷のために宿泊したかもしれない場所です。一九〇二年から三年かけて北四川路横浜橋北に印刷工場を建てた北米長老会印刷所美華書館から西へ五百メートルほどの宝山路に、一八九七年創業の商務印書館総廠は建っています。ここに越してきたのは一九〇四（明治三七）年ですが、なんだか美華書館を追ってきたみたいにもえますね。しかし商務印書館は一九三二年の第一次上海事変で日本軍の砲爆撃を受けて破壊され、再建された建物も一九三七年の第二次上海事変で壊滅的打撃を受けてしまいます。そして商務印書館が開設した上海一の東方図書館もわずかの蔵書をのぞいて灰燼に帰しました。美華書館もはっきりした理由はわかりませんが第一次上海事変ごろには廃業しています。どうも二つの印刷出版所は深く結びついているようです。

破壊される前の一九一〇年前後の商務印書館の内部を、アメリカ人女性フランシス・スタッフォード (Francis Eugene Stafford) が撮影しています。これだけ詳細に館内を撮影したのを見たことがありませんでしたので、見たときは興奮しました。本の名は『20世紀初中国印象』(上海市歴史博物館編 上海古籍出版社 二〇〇二年刊) です。今でも入手可能だと思いますが、私は上海博物館のミュージアムショップで求めました。

◎もっこも早く分合活字を使った印刷物は、一八三七年パリで出版されたポティエ (Jean Pierre Guillaume Pauthier) 著の『大学 *Le ta hio, ou la grande étude*』<sup>★図六八</sup>です。『大学』は儒教の経書ですが、その中国語対照フランス語訳本です。このフランス版は、フェルミン・ディードー (Firmin Didot) の印刷で、活字は「王立印刷所の彫刻師マルスラン・ルグラン (Marcellin Legrand) が鋼鉄に彫刻した漢字分合活字」と表紙に記されています。フランスの東洋学者ポティエは、一八三四年に老子の『道德経』(遅れて一八四二年に刊行されました) の対照訳本の出版を計画し、それに使う漢字活字の彫刻を王立印刷所の父型彫刻師ルグランに依頼します。ルグランは常用漢字二千字の父型彫刻を快諾します。この話はさまざま広東にも伝わり、月刊誌 *Chinese Repository* (アメリカン・ボードが一八三二年五月広東で創刊した英文雑誌で、漢字活字も使われています。☆註五八) 第三巻第一号 (一八三五年三月) にその記事が載りました。記事の表題は「漢字金属活字 パリにおける鋼鉄製パンチによる漢字活字のフォント製造の提案、ボストンにおける版木によるステロ版作成の試み」です。一部を以下に引用してみます (『印刷史研究』第三号所収、鈴木広光「中国プロテスタント」)。

ポティエ氏によって作成された金属活字についての情報は、最近パリで刊行された内容見本に拠っている。この内容見本に掲載されている活字見本から、ダイア氏作成のものより活字のボディが小さく、フェイスも硬く不自然であることが分かるが、これまでに見たヨーロッパ製の活字のなかでは、明らかに最も良い出来である。かって入手した見本で確かめ得たところでは、活字のサイズはグレートプライマーに相当する。

活字サイズは Great Primer 一八ポイントではなく、Two-line Brevier 一六ポイントが正しい。ダイア氏作成というのは Double Pica 二四ポイントです。

マッキントッシュと賀聖籙の文章にある M. C. Grand は M. Legrand の誤りであることが

## 一八三七年、 分合活字で 使った本が

## パリで出版される

★図六八……一八三七年パリのフェルミン・ディードー印刷の『大学』扉本文頁、バランスの悪い字はだいたい分合活字であるが、特に上下合成のものが悪い。  
【二五七〜二五九頁参照】

☆註五八……ここに使われている漢字活字は、ロンドン伝道会宣教師ロバート・モリソン (Robert Morrison) の中国語字典に使われた一六フルニエポイント長体漢字活字で、鑄造活字ではなく一字一字を彫刻したものである。中国語字典は全五巻、イギリス東インド会社が資金と設備を援助した。印刷はイギリスから派遣されたトムズ (R. Thomas)。一八一五年から二三年にかけて刊行。アメリカン・ボードは官憲の妨害によって広東を去り、三五年マカオに移転して印刷活動を継続した。マカオ移転時に東インド会社の活字を使うことができるようになった。この活字は一八五六年二月一日火災によって破壊された。

道光十七年

大學

LE TÁ HIO,

OU

LA GRANDE ÉTUDE,

OUVRAGE DE

KHOUNG-FOU-TSEU [CONFUCIUS]

ET DE SON DISCIPLE THSÈNG-TSEU;

TRADUIT EN FRANÇOIS AVEC UNE VERSION LATINE

ET LE TEXTE CHINOIS EN REGARD, ETC.;

PAR G. PAUTHIER.

PARIS,

IMPRIMÉ PAR FIRMIN DIDOT FRÈRES,  
IMPRIMEURS DE L'INSTITUT DE FRANCE,  
AVEC LES TYPES CHINOIS MOBILES SUR POINÇONS D'ACIER  
GRAVÉS ET FONDUS PAR MARCELLIN-LEGRAND,  
GRAVEUR DE L'IMPRIMERIE ROYALE.

M DCCC XXXVII.

Cura et Sumptibus Interpretis.

鋼新刻漢字四書叟鐵西儒西譯著

大學佛郎西國巴利京城活版鐫行

わかります。The Mission Press in China の原稿はペンによる手書きであつたと思ひます。手書きの字あるいはるを文選植字工は読み切れずにC.を理解してしまい、校正段階でも見落こされて、M. C. Grand が一人歩きしてしまつたのではないでしようか。これをそのまま引用した日本では、実在しない人物が長いあいだ生きていたことになります。

LA GRANDE ÉTUDE. 45

TCHING-TSEU [autre commentateur du *Ta' hio*; un peu plus ancien que TCHOU-PI] pour suppléer à cette lacune, en disant :

Les expressions suivantes du texte : *Perfectionner ses connoissances morales consiste à pénétrer le principe et la nature des actions*, signifient que si nous désirons perfectionner nos connoissances morales, nous devons nous livrer à une investigation profonde des actions, et scruter à fond leurs principes ou leur raison d'être; car, l'intelligence spirituelle de l'homme n'est pas évidemment incapable de *connoître* [ou est adéquate à la *connoissance*]; et les êtres de la nature, ainsi que les actions humaines, ne sont pas sans avoir un principe, une cause ou une raison d'être\*. Seulement ces prin-

靈 *ling* [*intelligentia*], c'est le principe immatériel qu'il désigne : 指虛靈言。

知 *tchi* [*sciendi-facultatem*], c'est la science morale que l'on possède naturellement : 卽本然之良知。

物 *we* [*actiones, vulgo res*], ce sont les actions de la vie : 是事物。

理 *li* [*rerum principia*], ce sont les principes des actions : 是事物之理。

未窮 *wéi khióung* [*nondum satis-investigata*], cette expression désigne un endroit qui n'a pas encore été assez examiné, pénétré, approfondi, épuisé : 是未考究到盡處。

\* Le *Ji Kiang* s'exprime ainsi sur ce passage : « Le cœur ou le principe pensant de l'homme est éminemment immatériel, éminemment intelligent; il est bien loin d'être dépourvu de tout savoir naturel, et toutes les actions humaines sont bien loin de ne pas avoir une cause ou une raison d'être, également naturelle : 人心至虛至靈。莫不有本然之知。而天下萬事萬物。無不有當然之理。

於	莫	而	靈	也	物	吾	物	謂	以
理	不	天	莫	蓋	而	之	者	致	補
有	有	下	不	人	窮	知	言	知	之
未	理	之	有	心	其	在	欲	在	日
窮	惟	物	知	之	理	即	致	格	所

rum principia °. Porro hominis cordis °  
intelligentia, haud non habet sciendi-  
facultatem, et cœlum infra [orbis] °  
actiones, haud non habent principia.  
Solummodo tã rerum - principia exist-  
tentia nondum satis-investigata-fuerunt;

ad supplendum hoc [capitulum], di-  
cens: id vocatur ad-summum-apicem-  
perducere scientiam consistit-ad pe-  
netrandum res, quod; significat: velle  
ad-summum -apicem-perducere sui °  
scientiam, consistit-ad investigandum  
actiones et penitus-exhauriendum ea-

補之 *poù tcht* [supplendum hoc], c'est pour suppléer  
l'explication des termes 致知格物 *tcht tchi khe we*,  
pénétrer les principes des actions en perfectionnant ou portant au  
dernier degré ses connoissances morales.

致 *tchi*, c'est porter à l'extrême: 推致 *touï-tcht*. 知 *tchi*,  
c'est la connoissance, la science naturelle et morale de notre in-  
telligence: 是吾心良知。

即 *tsi* [investigandum], c'est s'approcher très-près, se mettre  
en contact avec. Le caractère 物 *we* [res] est ici une expres-  
sion fautive, inexacte. 窮 *khioûng* [penitus-exhauriendum],  
c'est faire des recherches, des investigations profondes des causes,  
des principes, c'est-à-dire des principes que l'on découvre dans  
les actions, lorsqu'on les examine, qu'on le scrute de près: 是  
研究理即物中之理也。

◎ルグラン彫刻の分合活字は早い段階で国外に販売されたようです。『大学』が刊行された一八三七年に、ヴェネチアのサン・ラツァアーロ島にあるアルメニア修道院の印刷工場が刊行した総合見本帳 *Preces Sancti Nersis Clajensis Armeniorum Patriarchae* には、二五頁にわたってこの分合活字の組見本が掲載されています。<sup>★図六九</sup> ルグランの分合活字ができるまでにも、フランス王立印刷所<sup>☆註五九</sup>はすでに一六ポイントの鑄造活字二種を開発していますが、市販品ではなく王立印刷所内で使用するものでした。<sup>★図七〇</sup>

中国に展開するキリスト教各派は文書伝道のためになにをおいても鑄造活字を熱望していたに違いありません。インドのセランプルに展開していたバプテスト派も鑄造活字や彫刻活字を一八一〇年代前半には持っていました<sup>☆註六〇</sup>が、他の会派の印刷物には見られません。ヨーロッパでの中国学の進展を考えれば、かなり多くの漢字活字が開発されていたと思われるが、確認はまだできていません。また一八三五年ごろからロンドン伝道会のダイアが父型彫刻を始めた Double Pica 二四ポイント活字と、Three-line Diamond 一二・五ポイント活字は、ダイアの死をあとを引き継いだストロナックヤリチャード・コールの努力をもってしてもまだ完成にはほど遠かった。

『中国印刷史』を書かれた張秀民先生は、北米長老会は一八三六年に一組三千字を五千元で購入し、マカオの長老会印刷所に送ったと書いています。こう記述する根拠あるいは原典を書いておられませんので、正しいのかどうかわかりません。

*The Mission Press in China* では、北米長老会印刷所がマカオに進出したのは一八四四年です。マカオが開港されたのは一八四三年ですから、一八三六年には印刷所はマカオにはないはず。張先生の文章は買ったときと送ったときが違う文章構造かもしれません。

長老会印刷所の初代所長となるリチャード・コールは一八四四年二月二三日印刷機とともにマカオに到着、四月一日には三二三個の母型も到着します。宣教師ラウリー (Walter

## Legrandの 分合活字は 世界へ広がる

★図六九……一八三七年、ヴェネチアのアルメニア修道院印刷所の総合見本帳収録バリ製分合活字。扉の活字見本部分。この印刷所が分合活字を使って印刷した刊本は未調査。 [二六二〜二六四頁参照]

★図七〇……フランス王立印刷所制作の一六ポイント正体活字。一八三六年から三八年にかけて作られた活字で、中国四川省 Limerstone で彫られたという。Limerstone 府を考えられるが場所も特定できない。この他に同じポイントの平体活字も作られた。 [二六五頁参照]

☆註五九……フランス王立印刷所 ルイ十三世治下の  
一六四〇年、国王の栄光、宗教の発展、文学の進歩に  
役立つ出版物を刊行する目的で、宰相リシュリューに  
よってルーブル宮に設立された。一九世紀の激動の時  
代、名称を次々に変えながら生き残り、現在のフラン  
ス国立印刷局につながる。

一八〇四年―一八一五年 帝立印刷所  
一八一五年―一八四八年 王立印刷所  
一八四八年 政府印刷所  
一八四八年―一八五二年 国立印刷所  
一八五二年―一八七〇年 帝立印刷所  
一八七〇年以降 国立印刷局

一八〇四年はナポレオンの皇帝即位の年、一五年はワ  
ーテルローでの敗北とセント・ヘレナへの流刑、ルイ  
十八世のブルボン朝復活、四八年の二月革命でルイ・  
フィリップ退位と第二共和制成立とルイ・ナポレオン  
大統領選出、五二年ルイ・ナポレオン国民投票で帝位  
に就きナポレオン三世となる。七〇年プロシヤと戦い  
セダンで捕虜になり、フランスの帝政が終る。  
帝立、王立印刷所の所有する外国語書体の豊富さは  
有名で、多くの活字見本帳を出版している。見本帳の  
末尾には活字彫刻者の氏名と彫刻年を明記

Macon Lowrie) が、この年刊行した分合活字の見本帳『新鑄華英鉛印』の序論に次のように書いています。

東洋学者の関心はしばしば、中国語を金属活字で印刷するという課題に向けられてきた。最大の難点は、その文字の数にある。なぜなら、比較的頻用される文字でも五千を超え、さらに植物学や動物学、薬学の著作にいたっては、五千字のフォントでさえ対応しきれないほど膨大な活字が必要だからである。一万字あるいは一万五千字では場所を取るし、その使用も難しい。そのため多くの人々は、整版方式以外で中文を印刷することは実用的でないと考えてきた。十年前パリの何人かの中国学者が文字を分割するという計画を案出した。この方法によれば、大量で不便な活字を必要とせずに、如何なる中国語著作でも印刷できるというのである。当時中国伝道を意図していた米国長老会の海外伝道部は、母型の一組を入手し、この計画が実行可能であるかを实地にテストすることを決定した。数年間の苦勞の末(大部分は伝道部の通信・文書係によって行われたものであるが)、計画がかなりの程度熟してきたころで、印刷機と母型が今年、中国にもたらされた。そして活字が鑄造され、印刷所では中国語または英語で印刷を行う準備が整ったのである(前出 鈴木広光 『訳稿(下)』より)。

文章中の「数年間の苦勞」から、北米長老会がこの分合活字の母型を購入したのは一八四〇年前後と想像されます。ただ、四四年にマカオに送られてきた母型が三二三個と書いていますが、これだけで足りるはずありませんから、残りの母型は後送されたのかもしれない。

☆註六〇……セランプルミッションプレス カルカッタの北セランプルに伝道拠点を置いたイギリスバプテスト教会のケアリ、マーシュマン、ワードの三人が作った印刷所。インド諸言語による聖書翻訳と印刷を行う。またマーシュマンの中国語研究書「中国言法」を一八一四年に刊行。この印刷所が持っていた漢字活字は三種類である。



SINICE.

1

矜 萬 無 父 顛  
憐 物 始 聖 告  
爾 之 無 子 吾  
所 主 終 聖 主  
造 造 神 欽  
者 神 本 崇  
人 體 聖

430

3

矜	還	于	愛	天
憐	我	主	之	主
爾	因	收	子	聖
所	罪	我	以	父
造	先	離	覓	真
者	失	本	失	主
我	之	家	羊	者
大	聖	之	我	遣
罪	寵	敗	得	爾
人		子	罪	所

431

2

矜	懇	啓	之	同
憐	祈	我	主	光
爾	賜	愚	潔	三
所	我	蒙	淨	位
造	恩	光	我	一
者	祐	照	者	體
我	准	我	消	造
罪	我	悟	滅	光
人	所	茲	我	除
	願	時	罪	暗

抄松江學宮漢字元碑

上天眷命

皇帝聖旨諭中外百司官吏人等孔子

之道垂憲萬世有國家者所當崇奉曲

阜林廟上都大都諸路府州縣邑應

設廟學書院照依

世祖皇帝聖旨禁約諸官員使臣軍馬毋

得於內安下或聚集理問詞訟褻瀆

飲晏工役造作收貯官物其贍學地

土產業及貢士莊諸人毋得侵奪所

出錢糧以供春秋二丁朔望祭祀及

師生廩餼貧寒老病之士為眾所尊

敬者月支米糧憂卹養贍廟宇損壞隨

即修完作養後進嚴加訓誨講習道藝

務要成材若德行文學超出時輩者有

司保舉肅政廉訪司體覆相同以備選

用本路總管府提舉儒學肅政廉訪司

宣明教化勉勵學校凡廟學公事諸人

毋得沮擾據合行儒人事理照依已降

聖旨施行彼或恃此非理妄行國有常憲寧不

知懼宜令準此

至元三十一年七月 日

Inscription du temple de Confucius.

◎ラウリーの文章から、漢字活字の開発では彫刻しなければならない漢字の数がいつも問題になっていることがわかります。欧文ならたかだか二〜三百ですみますが、その三〇倍、五〇倍の文字数を彫らねばならないと考えたとき、きつこ気が遠くなるような思いを味わったのではないでしょうか。「十年前パリの何人かの中国学者が文字を分割する計画を案出」<sup>★</sup>とありますが、この学者とはポティエニパリ大学教授ハインリッヒ・クラプロート (Heinrich Julius Klaproth) です。文字を分割するというのは偏旁あるいは冠脚を別々に作っておき、それを組み合わせて一字を作る分合活字のこころです。クラプロートはフランス王立印刷所に楷書体活字の開発を提案し、一八三〇年から三四年にかけて同印刷所の父型彫刻師ドラフォン (Delafond) が偏旁の分合活字システムを使って作っています。<sup>★</sup>図七一

ヨーロッパの言語はアルファベットの文字を組み合わせて語を作ります。これを漢字に応用し、少ない単位に分割できるのではないかと考えるのは自然のなりゆきだと思います。そうすれば彫刻しなければならない文字は極端に少なくなるはずで、マカオの長老会印刷所華英校書房 (一八四五年寧波に移って華花聖經書房、六〇) が導入したフランスの分合活字の内訳は、

- 一、部首別に分類された単体活字 一、九六三字
  - 二、分合活字
    - 左右合成 三分の一幅 九八種
    - 上下合成 三分の二幅 一、三二七種
    - 三分の一幅 五〇種
    - 三分の二幅 四二四種
- 合計三、八五二種

分合活字は  
どのくらい  
彫刻すれば  
よいのか

★図七一……フランス王立印刷所の楷書体分合活字。  
一八三〇年から三四年にかけて東洋学者クラプロートの指導でドラフォンが彫った一八ポイント楷書体活字。分合のシステムを使った最初のもの。〔二六八頁参照〕

です。この分合活字の総数見本帳 *Characters Formed by the Divisible Type Belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Mission of the Presbyterian Church in the United States of America* (一八四四年刊、『アメリカ合衆国長老会海外伝道会議の中国伝道会が所有する分合活字による文字』) に収録されている漢字は二二、八四一字で、後に九一七字が追加され総計は二、三七五八字になります。★図七二 単体漢字を除きます。一、九三九種の分合活字で作られる漢字は二一、七九五字です。分合にすることでその一〇倍の漢字が作れると思ってしまうシステムですね。

この活字を彫ったルグランは、一八五九年パリで見本帳 *Spécimen de Caractères Chinois* 『銅新刻聚珍漢活字』を出しています。長老会の見本帳にくらべて若干文字数は増えています。その内訳は、

- |                    |        |
|--------------------|--------|
| 一、部首別に分類された単体活字    | 二、一五一字 |
| 二、左右合成／上下合成用の三分の一幅 | 一六九種   |
| 三、左右合成用三分の二幅       | 一、四四〇種 |
| 四、上下合成用三分の二幅       | 四六〇種   |

の、合計四、二二〇種です。分合活字を使って合成できる漢字は三万から三万二千字である★図七三 となります。

★図七二……一八四四年、マカオの北米長老会印刷所 *Presbyterian Mission Press* 刊の一六ポイント分合活字総数見本帳。ウイリアムズがバランスが良くないことを指摘した「竹」冠と、「草」冠の真、「竹」冠が右にずれて見えることがわかる。「草」冠も大きい。【六九・二七〇頁参照】

★図七三……一八五九年刊、ルグランの分合活字見本帳。三分の一幅の部首と三分の二幅の旁。【七一〜七四頁参照】

## CARACTÈRES CHINOIS.

## DIX-HUIT POINTS.

賢。使民不爭。不貴難得之貨。使民不爲盜。不見  
 功成而不居。夫惟不居。是以不去。第三章。不尚  
 不言之教。萬物作而不辭。生而不有。爲而不恃。  
 音聲相和。前後相隨。是以聖人處無爲之事。行  
 矣。故有無相生。難易相成。長短相形。高下相傾。  
 皆知美之爲美。斯惡矣。皆知善之爲善。斯不善  
 名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。第二章。天下  
 以觀其妙。常有欲以觀其徼。此兩者。同出而異  
 常名。無名天地之始。有名萬物之母。故常無欲  
 老子道德經。第一章。道可道。非常道。名可名。非





CLEFS ADDITIONNELLES, PERPENDICULAIRES ET HORIZONTALES.

矢 111	糸 120	臣 131	角 148	卩 163	音 180	黃 201
石 112	糸 120	白 134	言 149	酉 164	頁 181	黍 202
石 112	金 121	舌 135	谷 150	禾 165	倉 184	聖 203
示 113	雷 121	舟 137	豆 154	里 166	馬 187	龍 204
示 113	四 122	艮 138	豕 152	金 167	鼠 187	鼠 208
示 113	羊 123	色 139	豸 153	金 167	骨 188	鼻 209
禾 115	羊 123	艸 140	貝 154	長 168	骨 193	止 211
禾 115	羽 124	虫 143	貝 154	卩 170	鬼 194	
禾 115	禾 127	虫 142	足 157	隸 171	魚 195	
立 116	目 128	衣 145	足 157	隸 172	鳥 196	
立 117	耳 128	衣 145	身 158	雷 173	南 197	
立 117	月 130	雨 146	車 159	革 177	鹿 198	
立 118	月 130	見 147	辛 160	章 178	麥 199	
米 119	肉 130					

2<sup>e</sup> CLASSE.

GROUPES PHONÉTIQUES, PERPENDICULAIRES,  
Rangés par ordre de clefs et par nombre de traits.

1 TRAIT.	2 TRAITS.	3 TRAITS.	3 TRAITS.	3 TRAITS.	4 TRAITS.	4 TRAITS.
一 $\frac{1}{3}$	丁 $\frac{1}{12}$	丈 $\frac{1}{51}$	千 $\frac{1}{30}$	干 $\frac{1}{41}$	丕 $\frac{1}{123}$	六 $\frac{1}{163}$
丨 $\frac{1}{4}$	彳 $\frac{1}{21}$	彡 $\frac{1}{68}$	凡 $\frac{1}{67}$	么 $\frac{1}{37}$	丑 $\frac{1}{156}$	叕 $\frac{1}{83}$
ノ $\frac{1}{1}$	匕 $\frac{1}{17}$	下 $\frac{1}{63}$	又 $\frac{1}{60}$	弋 $\frac{1}{33}$	卅 $\frac{1}{162}$	夕 $\frac{1}{159}$
乙 $\frac{1}{2}$	冫 $\frac{1}{8}$	凡 $\frac{1}{48}$	口 $\frac{1}{53}$	弓 $\frac{1}{71}$	中 $\frac{1}{101}$	宀 $\frac{1}{160}$
	乂 $\frac{1}{7}$	丸 $\frac{1}{70}$	土 $\frac{1}{54}$	彡 $\frac{1}{66}$	丰 $\frac{1}{126}$	凶 $\frac{1}{151}$
	乃 $\frac{1}{19}$	久 $\frac{1}{57}$	士 $\frac{1}{52}$		冫 $\frac{1}{143}$	分 $\frac{1}{92}$
	九 $\frac{1}{13}$	毛 $\frac{1}{49}$	夂 $\frac{1}{69}$		彳 $\frac{1}{171}$	切 $\frac{1}{168}$
	二 $\frac{1}{23}$	彳 $\frac{1}{36}$	夕 $\frac{1}{62}$		屯 $\frac{1}{120}$	并 $\frac{1}{105}$
	人 $\frac{1}{22}$	才 $\frac{1}{45}$	大 $\frac{1}{59}$		子 $\frac{1}{78}$	勾 $\frac{1}{134}$
	入 $\frac{1}{9}$	乞 $\frac{1}{29}$	女 $\frac{1}{56}$		云 $\frac{1}{152}$	勿 $\frac{1}{142}$
	几 $\frac{1}{18}$	也 $\frac{1}{42}$	子 $\frac{1}{55}$		互 $\frac{1}{125}$	勻 $\frac{1}{113}$
	口 $\frac{1}{24}$	于 $\frac{1}{39}$	寸 $\frac{1}{43}$		五 $\frac{1}{140}$	午 $\frac{1}{90}$
	刀 $\frac{1}{6}$	彳 $\frac{1}{58}$	小 $\frac{1}{65}$		井 $\frac{1}{114}$	开 $\frac{1}{83}$
	力 $\frac{1}{15}$	彳 $\frac{1}{47}$	尸 $\frac{1}{74}$		亢 $\frac{1}{119}$	升 $\frac{1}{133}$
	匕 $\frac{1}{10}$	亡 $\frac{1}{40}$	尸 $\frac{1}{73}$		今 $\frac{1}{80}$	卞 $\frac{1}{155}$
	匸 $\frac{1}{25}$	亡 $\frac{1}{75}$	山 $\frac{1}{32}$		介 $\frac{1}{136}$	卬 $\frac{1}{102}$
	十 $\frac{1}{11}$	兀 $\frac{1}{35}$	川 $\frac{1}{50}$		令 $\frac{1}{167}$	卮 $\frac{1}{139}$
	卜 $\frac{1}{16}$	刃 $\frac{1}{31}$	叕 $\frac{1}{72}$		化 $\frac{1}{147}$	厶 $\frac{1}{121}$
	巳 $\frac{1}{14}$	刃 $\frac{1}{61}$	工 $\frac{1}{34}$		允 $\frac{1}{148}$	反 $\frac{1}{108}$
	厶 $\frac{1}{20}$	勻 $\frac{1}{46}$	巳 $\frac{1}{38}$		元 $\frac{1}{111}$	反 $\frac{1}{94}$
	又 $\frac{1}{5}$	勻 $\frac{1}{64}$	己 $\frac{1}{41}$		内 $\frac{1}{103}$	及 $\frac{1}{114}$

2<sup>e</sup> CLASSE.

GROUPES PHONÉTIQUES, PERPENDICULAIRES,  
Rangés par ordre de clefs et par nombre de traits.

4 TRAITS.	4 TRAITS.	4 TRAITS.	5 TRAITS.	5 TRAITS.	5 TRAITS.	5 TRAITS.
爻 $\frac{1}{77}$	支 $\frac{1}{100}$	另 $\frac{1}{118}$	且 $\frac{1}{189}$	加 $\frac{1}{209}$	号 $\frac{2}{3}$	余 $\frac{2}{68}$
壬 $\frac{1}{106}$	夂 $\frac{1}{95}$	牙 $\frac{1}{112}$	丕 $\frac{1}{190}$	旭 $\frac{1}{207}$	司 $\frac{2}{4}$	幼 $\frac{1}{208}$
夫 $\frac{1}{76}$	文 $\frac{1}{135}$	平 $\frac{1}{144}$	丘 $\frac{1}{191}$	包 $\frac{1}{210}$	四 $\frac{2}{5}$	弁 $\frac{2}{24}$
夭 $\frac{1}{133}$	斗 $\frac{1}{117}$	牛 $\frac{1}{124}$	册 $\frac{1}{192}$	医 $\frac{1}{211}$	圣 $\frac{2}{6}$	弘 $\frac{2}{25}$
太 $\frac{1}{158}$	斤 $\frac{1}{87}$	犬 $\frac{1}{81}$	世 $\frac{2}{64}$	匠 $\frac{1}{212}$	央 $\frac{2}{7}$	弗 $\frac{2}{26}$
夬 $\frac{1}{115}$	方 $\frac{1}{86}$	王 $\frac{1}{107}$	丙 $\frac{1}{202}$	叵 $\frac{1}{213}$	失 $\frac{2}{8}$	彡 $\frac{2}{27}$
孔 $\frac{1}{145}$	无 $\frac{1}{172}$		主 $\frac{1}{193}$	半 $\frac{1}{214}$	奴 $\frac{2}{9}$	必 $\frac{2}{28}$
尢 $\frac{1}{132}$	日 $\frac{1}{85}$		乍 $\frac{1}{194}$	占 $\frac{1}{215}$	妄 $\frac{1}{199}$	戊 $\frac{2}{29}$
少 $\frac{1}{89}$	月 $\frac{1}{99}$		乎 $\frac{1}{195}$	卯 $\frac{2}{17}$	孛 $\frac{2}{10}$	戾 $\frac{2}{30}$
尤 $\frac{1}{157}$	木 $\frac{1}{79}$		乏 $\frac{1}{196}$	去 $\frac{1}{216}$	宅 $\frac{2}{11}$	斥 $\frac{2}{31}$
尹 $\frac{1}{91}$	欠 $\frac{1}{104}$		弟 $\frac{1}{197}$	叟 $\frac{2}{19}$	宁 $\frac{2}{12}$	且 $\frac{2}{32}$
巴 $\frac{1}{122}$	止 $\frac{1}{149}$		龜 $\frac{1}{198}$	史 $\frac{2}{63}$	穴 $\frac{2}{13}$	百 $\frac{2}{33}$
巾 $\frac{1}{146}$	彳 $\frac{1}{130}$		台 $\frac{1}{200}$	只 $\frac{1}{203}$	尔 $\frac{2}{14}$	本 $\frac{2}{34}$
市 $\frac{1}{84}$	夂 $\frac{1}{88}$		付 $\frac{1}{201}$	可 $\frac{1}{217}$	尔 $\frac{2}{16}$	未 $\frac{2}{35}$
巾 $\frac{1}{137}$	比 $\frac{1}{127}$		以 $\frac{1}{129}$	旬 $\frac{1}{219}$	尼 $\frac{2}{18}$	未 $\frac{2}{36}$
引 $\frac{1}{131}$	毛 $\frac{1}{109}$		兄 $\frac{1}{222}$	台 $\frac{1}{220}$	巨 $\frac{2}{20}$	未 $\frac{2}{37}$
心 $\frac{1}{138}$	氏 $\frac{1}{97}$		冉 $\frac{2}{66}$	右 $\frac{1}{221}$	左 $\frac{2}{21}$	此 $\frac{2}{38}$
戈 $\frac{1}{96}$	乞 $\frac{1}{144}$		冊 $\frac{1}{204}$	另 $\frac{1}{223}$	目 $\frac{2}{65}$	正 $\frac{2}{39}$
戶 $\frac{1}{150}$	火 $\frac{1}{98}$		同 $\frac{1}{218}$	召 $\frac{1}{224}$	市 $\frac{2}{67}$	母 $\frac{2}{40}$
手 $\frac{1}{170}$	爪 $\frac{1}{154}$		冬 $\frac{1}{205}$	谷 $\frac{2}{1}$	布 $\frac{2}{22}$	氏 $\frac{2}{41}$
支 $\frac{1}{110}$	爻 $\frac{1}{161}$		出 $\frac{1}{206}$	古 $\frac{2}{2}$	平 $\frac{2}{23}$	民 $\frac{2}{43}$

2<sup>e</sup> CLASSE.

GROUPES PHONÉTIQUES, PERPENDICULAIRES,  
Rangés par ordre de clefs et par nombre de traits.

5 TRAITS.	5 TRAITS.	6 TRAITS.	6 TRAITS.	6 TRAITS.	6 TRAITS.	6 TRAITS.
艮 $\frac{2}{42}$	禾 $\frac{2}{58}$	舟 $\frac{2}{95}$	矣 $\frac{2}{116}$	囟 $\frac{2}{136}$	宀 $\frac{2}{214}$	米 $\frac{2}{173}$
永 $\frac{2}{44}$	立 $\frac{2}{60}$	舟 $\frac{2}{96}$	列 $\frac{2}{117}$	因 $\frac{2}{137}$	色 $\frac{2}{152}$	杀 $\frac{2}{175}$
永 $\frac{2}{72}$	艮 $\frac{2}{62}$	自 $\frac{2}{97}$	刑 $\frac{2}{118}$	狂 $\frac{2}{138}$	風 $\frac{2}{154}$	朱 $\frac{2}{176}$
戈 $\frac{2}{61}$		互 $\frac{2}{98}$	荔 $\frac{2}{119}$	圭 $\frac{2}{139}$	并 $\frac{2}{155}$	次 $\frac{2}{177}$
玄 $\frac{2}{45}$		巨 $\frac{2}{99}$	匈 $\frac{2}{120}$	在 $\frac{2}{140}$	爰 $\frac{2}{157}$	宅 $\frac{2}{178}$
瓜 $\frac{2}{46}$		交 $\frac{2}{100}$	匡 $\frac{2}{121}$	多 $\frac{2}{141}$	庄 $\frac{2}{158}$	辰 $\frac{2}{179}$
瓦 $\frac{2}{71}$		交 $\frac{2}{101}$	卡 $\frac{2}{216}$	夸 $\frac{2}{142}$	并 $\frac{2}{159}$	辰 $\frac{2}{181}$
甘 $\frac{2}{47}$		亥 $\frac{2}{102}$	危 $\frac{2}{122}$	如 $\frac{2}{143}$	式 $\frac{2}{160}$	丞 $\frac{2}{182}$
生 $\frac{2}{48}$		亦 $\frac{2}{103}$	委 $\frac{2}{123}$	好 $\frac{2}{212}$	夷 $\frac{2}{161}$	丞 $\frac{2}{183}$
田 $\frac{2}{49}$		伊 $\frac{2}{104}$	向 $\frac{2}{124}$	存 $\frac{2}{211}$	戎 $\frac{2}{162}$	未 $\frac{2}{184}$
甲 $\frac{2}{50}$		伏 $\frac{2}{105}$	回 $\frac{2}{125}$	字 $\frac{2}{217}$	戎 $\frac{2}{163}$	炙 $\frac{2}{185}$
申 $\frac{2}{51}$		任 $\frac{2}{106}$	同 $\frac{2}{126}$	宅 $\frac{2}{144}$	成 $\frac{2}{222}$	牟 $\frac{2}{208}$
由 $\frac{2}{52}$		休 $\frac{2}{107}$	合 $\frac{2}{127}$	安 $\frac{2}{145}$	逢 $\frac{2}{164}$	牟 $\frac{2}{186}$
炙 $\frac{2}{70}$		兂 $\frac{2}{108}$	名 $\frac{2}{128}$	守 $\frac{2}{220}$	斥 $\frac{2}{165}$	米 $\frac{2}{215}$
白 $\frac{2}{53}$		充 $\frac{2}{109}$	吏 $\frac{2}{129}$	寺 $\frac{2}{146}$	旬 $\frac{2}{166}$	米 $\frac{2}{218}$
皮 $\frac{2}{55}$		先 $\frac{2}{110}$	吉 $\frac{2}{130}$	赤 $\frac{2}{17}$	旨 $\frac{2}{167}$	米 $\frac{2}{215}$
皿 $\frac{2}{69}$		兆 $\frac{2}{111}$	君 $\frac{2}{131}$	屮 $\frac{2}{147}$	曳 $\frac{2}{168}$	网 $\frac{2}{221}$
目 $\frac{2}{54}$		光 $\frac{2}{112}$	各 $\frac{2}{132}$	苐 $\frac{2}{148}$	有 $\frac{2}{169}$	羊 $\frac{2}{187}$
石 $\frac{2}{56}$		全 $\frac{2}{113}$	后 $\frac{2}{133}$	苐 $\frac{2}{149}$	有 $\frac{2}{170}$	羽 $\frac{2}{209}$
示 $\frac{2}{57}$		酉 $\frac{2}{114}$	尻 $\frac{2}{134}$	州 $\frac{2}{150}$	束 $\frac{2}{171}$	考 $\frac{2}{188}$
禾 $\frac{2}{59}$		共 $\frac{2}{115}$	舌 $\frac{2}{135}$	荒 $\frac{2}{151}$	朵 $\frac{2}{172}$	老 $\frac{2}{189}$
						而 $\frac{2}{190}$

◎ Chinese Recorder 第六卷第一号（一八七五年二月）にアメリカン・ボードの宣教師ウイリアムズ (Samuel Wells Williams) は「Movable Type for Printing Chinese」を執筆し、パリ製の分合活字の欠陥を次のように書いています。

この母型一式は一八四四年中国に持ちこまれ、アメリカ長老会の宗教関係の印刷に主として使われました。この活字は外国人技術者が苦勞して作ったものですから、中国人の嗜好に合わなかったとしても驚くにはあたりません。画線が細すぎ、終筆が小さなハネで終ることが多く、筆で書かれた文字とは異なる形をしていました。また、例えば「材」のように偏と同じ大きさの三画の旁を組み合わせた場合、文字各部分のバランスの崩れが生じますし、二十画の「權」などではその姿形は心地よくなくあまり使われませんでした。合成による姿形の崩れは「筧」や「籩」など上下合成の文字でさらに大きくなりました。このようなバランスの崩れた文字が多いとページ全体の美観が損なわれてしまいます。しかし条件つきではありますが、この合成による方法は便利なものでありました。

中国人の好みに合わなかったとありますが、合成字を見るにたしかにバランスの崩れた字が多く、中国人だけでなく日本人でもこの字形では満足できないでしょう。偏の幅は画数によって変化しますし、冠も脚にくる文字の複雑さによって上下幅がさまざまに変化します。それを三分の一と三分の二に固定化・単一化することは、本来持っている文字のバランスを無視することになります。漢字は同じ部分を組み合わせて作られてはいますが、その各部分は文字によって線の位置、長さ、幅が変わることで一字としてのバランスを保ちます。分合活字は金属のボディを持っていますので、活字ボディを超えて線を設定できない、たとえば偏旁構造の文字で旁のハライなどが偏のボディ部分に伸びることは不可能です。単体活

分合活字は  
致命的欠陥を  
持っていた

字であれば正方の活字表面の中で自由に線を伸ばすことができず、分合では中途半端な印象を残すだけです。

本木昌造が美華書館から導入した三号はこの分合活字でしたが、明治五年の「崎陽新塾製造活字目録」(二七頁、図七)の掲載活字八字には分合はなくすべて単体活字です。ここから分合活字の欠陥を見つめることはできません。導入された分合活字三号は、組み合わせで一字を作るという植字の面倒さ、字形の不備もあって日本ではほとんど使われることなく、早い時期に新刻された単体文字にきりかわったものと思われます。

長老会印刷所の所有する活字はこの一六ポイント分合活字だけでしたが、書籍を印刷しようとするには一サイズでは足りず、どうしても何種類かのサイズが必要になります。前にも書きましたが、ロンドン伝道会のダイアが開発中の大型サイズと小型サイズの書体は、彼の死(二八四三年)によって、完成は先のことになりました。そんなときベルリンの活字鋳造業者バイエルハウス (August Beyerhaus) が援助を申し出ます。バイエルハウスはダイアが開発を進めていた二つのサイズの間で、分合活字のシステムを使って作ることにしました。サミュエル・ウイリアムズによれば父型の彫刻数は約三二二〇〇字。そしてそのサンプルを見た感想として「ルグラン氏がパリで作った分合活字よりもはるかに優雅な姿形をしている」と書いています。しかし開発速度は遅く、母型が寧波の華花聖經書房に届いたのは開発開始から一五年目の一八五九年のことでした。この活字は Double Small Pica 二二ポイントで、『教会新報』に掲載された美華書館活字広告(五頁、図一一)中の右上がりの構造を持つ二号です。

ルグランの分合活字の字形で問題となった上下合成をやめ、偏旁の左右合成だけにしています。バイエルハウスについては詳しいことはわかりません。しかし一八四〇年に北ドイツのブラウンシュヴァイクで刊行された *Gutenberg's Album* には、バイエルハウスが作った楷

★図七四……二号分合活字一八六一年上海美華書館印刷「天路指南」。寧波の長老会印刷所華花聖經書房は六〇年一二月上海に移転して美華書館と改称した。バイエルハウスの二号分合活字が寧波に到着したのは、五九年なので、この本は二号を使った早い時期の刊行物といえる。  
【七七・二七八頁参照】

天路指南序

天下皆謂道出於天，是卽所謂天道也。夫惟皇降衷，厥有恆性，則天道自在人心，而人心何以不能盡天道耶。此無他，蓋第卽天之賦畀於人者，而指之曰天道，而吾天已不全也。夫道猶路也，知之不能盡，行之安得至乎。聖書曰：道與神共在。又曰：道成人身。且曰：生在道中。而耶穌亦明明曰：我乃路也。是道也，何道也。曰：舉天路以示人之道也。曷言乎舉天路以示人，欲人知生從何來，死從何去，由正路而勿入於迷途也。夫人莫不求福，而獨不求天上之永福，人莫不求生，而獨不求天上之永

生、而天路於是乎日遠，是故知人而不知神，不足以問天路，知多神多主，而不知一神一主，亦不足以識天路。知神矣，知一神一主矣，而猶恃法恃功，而不恃恩，亦終無以得天路。我等信耶穌者，蒙天父之鴻慈，賴基督之贖救，受聖靈之感化，拔諸罪惡之中，而登諸天路之上，何其幸哉。然而知之匪艱，行之惟艱，夫天下之勢，不進則退，不前則却，由天路而向天國，中間豈有駐足之處耶。藉非有一定不移之分限，將見差以毫釐，失之千里，不且惶惑而無路耶。我牧師倪維思先生，有天路指南之作，自悔改始，至慎終止，章節篇段，津津有條，反覆叮

嚀，亶亶無已。其所以提撕而警覺我等者，莫不深切著明，瞭如指掌，洵我等所宜奉爲指南之準的者也。書成，出以示余，囑余以序。余愧謏陋無文，竊有難色，而先生固索之，余不得已，爰爲之弁其簡端如右。所願覽是書者，沉潛玩索，得之於心，發之於行，因所指之定向，爭先

書活字一二八字の見本が掲載されていますので、かなり早い時期に漢字活字を作っていたことがわかります。★図七五

分合活字の考え方は、彫刻する漢字数を大幅に減らすことに成功しましたが、金属のボディの組み合わせという制約もあって、字形の完成度に恨みを残しました。しかし現在のデジタルフォントの漢字の多くは、いろいろな部分を組み合わせで作られているはずですので、これは分合活字の考え方も同じです。金属の分合活字と違うところは、ボディは仮想の存在であるということです。優れた書体を生み出すことができる環境は昔にくらべてはるかに整いましたが、しかし、字形の優劣を決めるのはデザイナーの豊かな経験と研ぎすまされたセンスであることは言うまでもありません。

★図七五……バイエルハウスの楷書体活字一八四〇年刊行の Gutenberg's Album に収録。後ろから三行目「石」が転倒している。「二八〇頁参照」

◎組版仕線

書体＝ヒラギノ明朝 Pro W3 (漢字・欧文・アラビア数字)＋樂地体三号組版名 (仮名, 「日本の活字書体名作精選」より)  
見出し＝サイズ：60 級／中見出し＝サイズ：32 級、字送り：プロポーションナル、行送り：40 ㎥  
本文＝サイズ：16 級、字送り：16 ㎥、行送り：30 ㎥、1 行：41 字詰め・22 行  
脚注＝サイズ：10 級、字送り：10 ㎥、行送り：13 ㎥、1 行：21 字詰め・50 行  
◎発行＝大日本スクリプト製造株式会社 ◎デザイン・組版＝向井裕一 (gymh)

(2005.04.12)

参考文献・関連書籍

- 「中国印刷史」張秀民著、上海人民出版社、一九八九年
- 「本の活字の歴史事典」印刷史研究会編、柏書房、二〇〇〇年
- 「印刷史研究」第一号、印刷史研究会、一九九五年
- 「印刷史研究」第二号、印刷史研究会、一九九六年
- 「印刷史研究」第三号、印刷史研究会、一九九六年

Chinesisch.

月魚无鳥與鹵小雨弓艸齊糸齒性辛風  
 鼻夕齒犬齊支龍大龜士龠子黃火麥父  
 少飛曲黍父黑土聚舛箭九鼠白吳言山  
 明臣高目雷日嬰木母水萬冰番片食米  
 學皿糸經生田耒用美音々女覺矛黃海  
 象竹巾自老貝玉藥之虎香足本赤箋工  
 要而走瓜行革米馬虫牛支隶内阜走鬲  
 片豆悲青血示文衣韭非治玄頁巾谷感

© Schrift von N. Meyerhaud in Berlin.

Seite 13—22.  
verfaßt von einem I.  
und Medicinalraths  
zu Königsberg. I  
trags, der nur ein  
wesentlichen Mächte  
Strenge kaum auf  
Nufen zu stützen; -  
meinschaft unserer  
streben bleibt.

Seite 65. »E  
Steinbach, der erste  
ter Sabine, die es

Seite 107. »U  
Christenbunde nann  
1204 ihre einzigen  
verheerten. »Missb

Seite 321. »E  
mächtig durch die  
Suomi. Der ein  
dem S e h e r. Rep  
denthums, waren il  
findet solche noch ir

Seite 323. »A  
sterbliche Verdienste  
gab 1548 eine sinni  
aus, und später die  
cola studirte zu Wi  
Philosophie.

Seite 323. »K  
in Finnland wurde,  
bedeutet Saksa (Sc